

漁撈の部

○ 瀬魚、さば 一本釣漁業試験

趣 旨 管内漁業者はとびうお漁業に対する依存度が非常に強く、とびうお漁業終了後は見るべき漁業なく、合理的な年間操業が行われていないので、近海瀬魚及さば釣漁業試験をなし、近海漁業から、遠洋漁業への気運を高むべく指導に当らんとす。

試験方法

1. 指導船 かむめ丸 19.59吨 50HP

2. 試験期間

第一次航海(瀬魚)

昭和30年4月2日～4月7日 漁獲高 44貫300匁

第二次航海(さば)

昭和30年6月12日～6月17日 漁獲高 95貫750匁

第三次航海(瀬魚)

昭和30年9月20日～10月2日 漁獲高 26貫610匁

第四次航海(さば)

昭和30年10月12日～10月15日 漁獲高 173貫

第五次航海(さば)

昭和30年10月17日～10月22日 漁獲高 230尾

○ 第一次航海

餌料 いか9箱 さば3箱 角とび 12尾

砕氷 4屯

経 過— 4月2日8時10時10分西之表港巻漁場へ向う。浦田岬より伊阿沖合にかけて魚探にて水深100m線を調査するも雨天のため風雨強く操業困難にて漁獲なし。浦田港に投錨

4月3日 水深130m～170mにて まつだい(3×400匁)、れんこだい(8×600匁)の漁あり。沖浜田投錨

4月4日 潮退く、水深160mにて まつだい(2×400匁)、れんこだい(3×900匁)

4月5日 熊野SE/E10哩附近操業。漁少し。

4月6日 大沖崎(SE)操業するも漁悪く、浦田避泊。

4月7日 水深140m～170mにて操業す。

考 察— 餌料積込後天候悪く思う様に操業出航おかつたが、東海岸における真鯛漁場は伊阿沖から熊野沖に在るものと思われる。水深130m～170mでは中は止まい。

○ 第二次航海(さば釣漁業試験)

餌料 いわし 30箱

氷 3.5屯

整一週 :- 6月12日鹿兒島港佐野岬三方首根漁場に向う。

19時30分操業開始、固まなく魚群浮上を見て、はね釣をもちて釣獲す。濃度稀薄な魚群を移動激しく、餌付悪く漁獲537尾西之表に帰港す。

6月13日15時30分漁場へ向う。19時30分操業開始、浮上悪く、漁獲237尾にて5時50分山川港に入港。

6月15日17時50分山川港19時30分操業開始、夕真澄に少しの浮上あつたのみにして漁獲僅か、山川港に入港し、6月17日に更に漁場に向う。浮上悪く僅か52尾

○ 第三次航海

餌料 めちか25貫、冷凍いか26貫

氷 5屯

整一週 :- 9月20日18時西之表港、平瀬漁場へ向う。

9月21日4時平瀬附近着、6時操業開始、魚探にて水深120~180m線を調査するもN.E流の急潮のため縦立悪し正午まで操業するも漁獲僅かのため平瀬漁場へ向ひ操業するも急潮流のため漁獲はたまめ2尾、しょうぶ2尾、くちぶ2尾で漁獲いたため中之島へ向う。19時30分中之島投錨。

9月22日 夜半より台風予報を警戒し、中之島港口永良部島へ向う。12時口永良部西側附近調査開始するもS.Eの強流であつたが、餌付悪く180mでほたて5尾、100m線で白たい5尾、たまめ1尾、しょうぶ2尾、えび1尾、稚3尾を漁獲し、口永良部に仮泊す。

9月23日 中之首根附近操業、首根の北側水深160m~170mでちびき500匹のものの漁があつたが中央部では水深120m~130mで赤目、ほたか釣れ、南側の170m~180mでは稚ものであつた。中之島仮泊す。

9月24日 諏訪瀬北側操業す。Nの風波強く操業困難であつた。漁獲はまっちびきが少量であつた。

9月25日 宝島に避泊

9月26日 宝島操業、漁獲まつ27尾、その他の漁があつて、台風22号接近のため古仁屋港に避難す。

9月30日 古仁屋投錨

10月2日 西之表入港

○ 第四次航海(鯖釣漁業試験)

餌料 大碓いわし 10箱

氷 3屯

経 過

10月5日 西之表港、餌料、氷積込に鹿兒島へ向い、10月12日鹿兒島港漁場へ向う、18時屋久島の矢筈13.2附近操業約520尾釣獲

10月13日 宮之浦出港漁場へ向う、18時40分操業開始し漁獲360尾

10月14日 操業位置矢筈13.2附近、漁獲485尾

合計173貫を漁獲し西之表港に10月15日7時20分帰港す。

○ 第五次航海(鰯釣漁業試験)

餌料 きびなご 2箱

氷 2屯

経 過

10月17日 13時20分西之表港、屋久島漁場へ向う、18時50分操業開始前航海に比し さばの浮上悉く大きば185尾、小さば45尾を漁獲したが本航海は台風26号の接近で風浪高く操業を断念し18日6時40分より宮之浦港に避泊し、10月22日 西之表に帰港す。

飛魚漁業調査

(一) 趣 旨

慶長の昔から毎年八十八夜前後になると潮の潮に乗って大挙来游する飛魚は大きく島民の経済に寄与して来た、即ち貯蓄投資の往來な當時に於いては飛魚の塩干品等最も大衆に愛用珍重され商品としての価値も大きかつたものと思はれ従つて漁の豊兎が直接島民の生活に影響して来たことは言を俟たない。

近年此の飛魚漁業も不漁続きで漁民の苦惱は深刻で此れが原因を究明し危殆打開の一助にヒ人と該調査を実施した。

(二) 概 況

年間100万貫の水産総生産額の中約50%は飛魚が占め、鰯も島民はこの飛魚によつて一年の生計を支へていたが昭和25年以來の不漁続きに漁民生活は苦境に迫込まれ漁業採取、採もぐりによつて生計の一部を支へている現状である。特に今年度は馬毛島で初漁を完、大漁を期待して出漁したものの6月に入つて魚群は全く姿を消して終つた。一方屋久島に於いても初漁は少しおくれたが5月中旬以降好漁が続いたが馬毛島同様6月には終熄している。漁況は前年度を上廻るものであつたとは云え当時期待した程の漁ではなかつた。

当何では昭和27年以降捕獲船かむめ丸を調査に当らしめ、又飛魚漁船に乗船して魚群を見ているが、別紙調査書の統計にあるように屋久島と馬毛島の飛魚船の一隻当りの漁獲量が非常に異つている。

飛魚の来游及産卵状況をよく観察すると毎年一定した海岸に来游し、産卵は自然の状態とするよりもむしろ人為的刺戟による産卵の方が非常に多い様である。